
隠人（おに）使い< 2 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おに
隠人使い<2>

【Nコード】

N4487N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

「厄介な奴だ。」綾は言った。式神が告げた ナイト・メア が
いよいよ姿を現す。

隠人使い 第2話です。

式（前書き）

こそこそ、更新中。

式

京王線 明大前駅のすぐ側にあるレストランで食事を終えた綾と望は駅で別れた。

2時間程前の事である。

望はそのまま上りの電車に乗り、今は自宅となっているマンションへと戻っていた。

上着と鞆をベッドの上に置き、自分は寝っ転がる。眼前の白い天井を見上げ、

「綾が言っていた、ナイト・メアって。」

と、食事中の会話を思い出す。

「人の夢の中に出てきてその人が無意識に『欲望』しているものを現実にする奴さ。」

綾はそう言った。

「夢の中か。」

望はぼけーっと、「それは確かにやつかいな奴かもしれないー、綾の言う通り。」

呟く。「目に見えるものならまだしも、夢の中じゃね・・・」

そんな事を考えてるうちに、望は部活の疲れと満腹感から眠りに落ちていった。

夢を見た。

N・Yに両親と一緒にいるはずの妹の菜穂が、夕食を作っている姿。

(あれ、菜穂・・・)

小学6年生になったばかりの、その後姿を眺めながら、それが夢なのか現実なのか、望には判らなくなっていた。

やけに、リアル。

「何やってんの、菜穂。」

望はその後ろ姿に問いかけた。

「お兄ちゃん、起きたの？」

妹の菜穂が望のマンションのキッチンで振り返り、にっこりと笑う。「今、お夕食作ってるから。お父さんとお母さん、仕事で遅くなるって。それと」

そこで望の顔を見つめ、「今度のN・Yの出張ね、菜穂だけじゃなくお兄ちゃんも一緒に行くことになったって。」

「え？」

「良かったでしょ、お兄ちゃん。」

菜穂はキッチンを離れ、望が横たわるベッドの脇に近づいて来た。「お兄ちゃん、本当は一緒にN・Yへ行きたかったんでしょ？」

「それは・・・」

「確かに、日本で医者になりたいっていうの判るよ。でも、お父さんもお母さんもアメリカでは総合診療・・・GMとかというのが発展してて、お父さんもお母さんも一緒にN・Yへ連れて行こうって言うってたんだよ。」

「本当？」

望は体を起こした。

夢じゃなかった。

今、目の前に妹の菜穂の笑顔がある。

（じゃ、ここは家？）

望は目をこすった。

「だから、お兄ちゃん、約束して。」

菜穂はにっこりと微笑んで、「もう二度と、土御門 綾と付き合い合わないって。」

「え！？」

その名前に、望は目を見開いた。

「・・・どういう事。」

「ね、お兄ちゃん。」

目の前の菜穂が右手の小指を差し出す。「約束してくれないと、お兄ちゃん、菜穂たちと一緒にN・Y行けないよ。」

「・・・・・・・・」

時間が。

空間が。

望の中で歪んでいた。

「ね、お兄ちゃん。」

目の前の妹の姿を見つめる事しか出来なかった。

オキ口・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

何処かで、菜穂以外の声がした。

オキルンダ ノゾミ！

その口調の厳しさに、望はベッドから勢いよく起き上がった。

目の前は光の洪水。

それが、室内の電気だと気付くのにそれ程時間はかからなかった。何故なら――目の前に、土御門 綾の顔があったからだ。

「・・・・・・・・綾。」

望は額の汗を拭い、「どうしたの。今、ここに妹の菜穂がいたんだよ。」

「それは夢だ。」

いつもの冷たい眼差しで、綾は告げた。

「お前は今、ナイト・メアに魅入られる所だったんだ。」

「ナイト・メア？」

望は目を丸くした。「何だって俺を？」

それから、より一層強く、綾の目を見つめ、

「どうして君がここにいるんだ？」

「お前が持つ式神が知らせたのさ。」

綾は微かに口元に笑みを浮かべて答えた。

「どういう事。」

「学校の帰りに俺の使いの式神をお前は無意識に持って帰っただろ？」

「式神を？」

望は目を丸くし、そして慌てて制服の後ろポケットに手を入れた。そこには、カラスだったはずの1枚の白い紙――正確には、中心に五芒星が描かれたもの。

「そう。」

綾は頷き、「それが先刻、俺の所へ知らせに来たんだ。」

「でも、また帰って来た訳？その式神。」

「俺が命令したんだ。俺が行くまで望の元にいろ、と。」

そう言つと、綾はその紙を受け取り、左手の上に乗せた。

「印。」

右手の人差指と中指を額にかざすと、綾はそう一言告げた。

バツ・・・

すると、その紙は青白い炎を微かに残し、焼け消えた。

「何、何。何やったの？」

望は身を乗り出した。

「『闇』へ返したのさ。」

綾は無表情に、「必要以上に『闇』の力を借りてはいけない。それは、いつしか自分を『闇』に身を置く事になるから――俺の父の云い付けだ。」

「そう・・・。」

望は肩を落とした。

しかし、綾へはにっこりと笑い、

「何はともあれ、綾がいて、助かったよ。俺、綾がいなかったら

そのナイト・メアとかいう『闇』の人の虜になっていたかもしれない。」

「そう。それが、彼女の目的さ。」

綾は答えた。「自分の『欲望』（心の弱さ）と引き換えにその『魂』を奪う……そういう奴さ。」

同じ頃。

下高井戸にある家の2階の自室で、井上 遥は英語の予習をしていた。

きちんと片づけられた机の片隅には、赤い携帯電話。

遥は時折、その携帯のメールをチェックしていた。

「優子からか。」

軽い溜息を付く。

遥には片想いの人がいた。

1学年上で野球部の少年。将来の活躍を約束された様なエースで4番のポジションの人だった。

遠巻きに何度か練習試合を友人と見に行った事もある。

でも、その人にはもう彼女がいる、という噂もあった。

来年の春には、卒業してしまう人。

「はあ。」

友人の仲介で何とかメル・アドの交換は出来たものの、それ以上は何もなかった。

遥が送ったメールの返事も、ただのメル友的な返事。

「告^{こく}るしかないかなー。」

パジャマ姿の遥は、机の上に頭を乗せた。

時刻は8時をとくに廻っていた。

「遥、ご飯よ！」

階下から、母のそんな声が聞こえてくる。

「食欲なーい。」

遥はそう返事をする、再び勉強を始めた。

あとは、何とか同じ大学に入るのみ、という想いも彼女にはあった。

たぶん、あの大学に行くだろうと・・・

「えっと。何処までやったっけ。」

右側に置かれた教科書をもう一度めくり直す・・・と、その手が止まる。

「あー、眠い。」

そう呟き、「ちょっとだけ。」、遥は再び机の上に頭を乗せた。

夢を見た。

あの人が試合をしている所だった。

「飯田先輩だ！」

夢現ながら、夢の中で彼を見れた事だけで幸せな遥。

その夢の中では、遥はベンチでマネージャーをしていた。

「おい、井上！」

少年がベンチに駆け寄って来る。「水くれ、水！」

「うん！」

遥は微笑み、青いクーラー・ボックスの中からペット・ボトルを1本取り出し、彼に差し出した。

「ありがとう！」

そう言くと、飯田は再びマウンドへ走って行った。

「何か、幸せー！」

遥はにつこり、と笑った。「こんな夢見れるなんて。」

「このまま、夢で終わらせたい？」

何処からか、女性の声がした。

ベンチに座っている遥が、その方向を見ると一人の金髪の女性が立っていた。

「あれ？夢？現実？」

遥は戸惑った。彼女に声をかけた女性は、

「私と契約するのなら、貴方の望を叶えてあげてもいいわよ。」

女性は、そう言った。

「契約、って？」

遙が尋ねると、「……だよ。」

声が遠くて、あまり聞き取れなかったが、

「飯田先輩の近くにいろのなら、何でもいいわ。今年の初詣も飯田先輩と両想いになれますように、って祈ったんだから。」

「ふふふ……」

女性は艶やかに微笑み、「じゃ、貴方の望を叶えてあげる。」

彼女は右手の小指を差し出した。「約束。」

「うん。」

ためらいも無く……夢の中だからと思い、遙はその小指に自分の小指を絡ませた。

「遙、ご飯食べなさいっ！」

階下から聞こえる母の声は、遙にはもう届かなかった。

遙はそのまま机の上で、深い眠りに就いていた。

るるる　るるる

MDの音楽の中、携帯の着メロが一瞬鳴っただけである。

式（後書き）

暑いと頭がボケる・・・（言い訳）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487n/>

隠人（おに）使い< 2 >

2010年10月8日11時20分発行